医療事故について会見で謝罪する井口昭久病院長㊥ら＝14日午後、名古屋市昭和区の名大医学部付属病院で

術後、出血し昏睡状態

10代の女性患者 名大病院で医療事故

名古屋大付属病院（名古屋市昭和区）は十四日、三月下旬に首にある甲状腺の全摘手術をした十代の女性患者が手術後、内出血を起こし呼吸が停止する医療事故があったと発表した。女性は昏睡（こんすい）状態が続いているという。

病院によると、女性は甲状腺腫瘍（しゅよう）を伴うバセドー病。手術翌日の午後、軽い呼吸困難と首に腫れが認められた。超音波検査をしたところ、首で皮下出血していることが分かり、手術後の出血による腫れと判断。同日午後六時に血腫を除去する緊急手術をすることを決めた。

手術を待っていた午後五時ごろ、突然、意識が消え、呼吸が停止。血腫による気管圧迫で窒息状態に陥ったとみて、再手術で血腫除去と止血をした。女性は低酸素状態による脳障害で、再手術後のコンピューター断層撮影検査では広範な脳浮腫が認められた。自力での呼吸はできず、人工呼吸器をつけて昏睡状態が続いているという。

手術したのは四十代の医師。経験十七年で甲状腺手術は百六十八回手掛けているベテラン。手術は通常通りに行われ、重大な部位を傷つけることなく、止血もきちんと行われたという。今後、事故調査委員会で原因究明を進める。

会見した井口昭久病院長は「今回のような事態を招いたことを深くおわび申し上げます」と謝罪した。

18. 4. 14 中日